

## 冬枯れの風景

鈴木功男

その写真は、山の頂の雲間から眩しく射す陽の光を背に受け点滴装置を握り締め、寒そうに藍色の絆纏を羽織り、微かに笑いながらVサインを送る痩せた坊主頭の息子亮平の姿があった。

「今朝、初日の出をみんなと一緒に見ましてね……」

若い男性看護師のNさんが、いつもの明るい声で今朝の亮平の様子を詳しく語ってくれた。亮平は傍らのベッドで、今朝の行動に疲れたのか大きく息をしながら眠っていた。

「いつもは、毎年友達みんなと三島まで初日の出を見に行くんですけどね」

そういえば元日早朝、家族がまだ寝ているのに亮平一人自分の車オデッセイを走らせ、生まれ育った三島の高台まで出掛け、中学時代の友人達と初日の出を見るのを毎年の楽しみにしていた。そこは三島の北端に位置し、富士山の長い裾野までが一望に見渡せる丘陵地であった。

「今朝の初日に何を願ったのかねえ」

そう言ってしまってから、私は慌てて自分の馬鹿な発言を恥じた。Nさんは黙って微笑を返してきた。

この病棟に移って来てから、すでに一ヶ月が過ぎていた。一昨年の三月末に突然、「胆管細胞癌」の告知を受け、それはすでに手術も出来ぬ程に進行した癌であったが、それから通院での抗がん剤治療を続けてきた。しかし昨年の十一月初め、末期癌特有の腹水急増と激しい嘔吐下痢で緊急再入院となった。そしてその著しい体力消耗と精神的苦痛は、一般病棟での治療に限界が来ていることを示していた。主治医の薦めもあり先月初めに、この「緩和ケア病棟」に移ってきた。

この病棟は、一般病棟から少し離れた位置に在り、別棟の持つ独特の静寂さと落ち着いた雰囲気、当初予想していた「陰気な暗さ」はどこにも感じ取れなかった。

与えられた部屋の窓際の戸を開けると、木製の落ち着いたテラスが在り、遠くに伊豆半島の山脈が見え、その手前には駿河湾そして沼津の街並みが一望に見渡せた。病棟近くには若木のバラ園があり、その向こう側は広葉樹林と萱林で広く覆われ静寂さを増していた。テラス近くには、蜜柑の木が等間隔で植えられ、その黄色く熟した実と緑の葉が冬枯れの索漠とした光景に強く輝いて見えた。

「どうですか。少しは落ち着きましたか」

この新病棟に移って約一週間後、妻と私は主治医に別室へ呼ばれた。そこには担当看護師のNさんと臨床心理士が同席していた。その頃の亮平は、静寂な病室と洗練されたスタッフの緩和ケア治療によって、精神的にも安定し久し振りに笑顔を取り戻していた。そして点滴装置を押しながら病棟の廊下を、体力維持のためと称して歩き回るのを日課とするまでに回復していた。

「皆さんのお陰で、本当に元気に満ち足りて過ごしています。大変感謝しています」

妻と私は、今の落ち着いた心境と安堵感に満ちた気持ちを素直に伝えた。

「実は、亮平君の病状はかなり危険な域に達しています。腸から先は完全に塞がれ、腸閉塞と言いますが、もう飲み食いは完全に出来ず全てが激しい嘔吐になります。また胆汁の出る量も最近かなり減っており心臓も弱っています。体力衰弱も著しく、自分の力で動けなくなるのも間近だと思えます。また病気の方は脳にも進行し、今後は会話や行動に異常が出る可能性があります」

主治医は、分厚いカルテに目を通しながら淡々としかし時おり苦渋に満ちた顔で、話す言葉を選ぶようにゆっくり病状説明を続けた。

「今元氣そうに見えるのは、特殊な薬を投与しているからで、その効果も約一ヶ月で切れます。その時の病状の急変を、大変辛いのですが今から覚悟をお願いします」隣に座っていた妻は、思わずハンカチで目を覆っていた。今あんなに元氣そうなのに、まさかそんな間近でと思った。

「今年の暮は越せないのでしょうか……」

その言葉を発するのが精一杯であった。主治医は、また苦悩に満ちた表情でしばらく黙っていたが、大きく息を吸い込んでから

「越せば良いのですが……。とにかく亮平君の好きなことを、みんな協力して精一杯頑張らしましょう」

主治医は、部屋中の全員に言い聞かせるように、そして自分自身にも強く納得させるように大きな声で結んだ。

すでに亮平は、飲み食いが儘ならないことを自覚し、好きな飲料水、好きな果物等を次々に注文し、口に少し含んでは味わいすぐに吐き出す方法で満足していた。しかし時には我慢しきれず飲み込み、激しい嘔吐で苦しく吐き出す辛い場面もあった。その後、咽喉もやられ声を発するのも苦痛となり、会話も首を縦横に振る限定的なものとなった。しかし体力が著しく消耗し衰弱しても、何とか自力でベッドから這い上がり、トイレにだけは自力で行った。それは、自分は最後まで可能な限り他人には頼らず自力で生きて見せることを、我々に強く示唆しているように見えた。

「亮平君は本当にぶれないですね……」

突然Nさんが、まだ大きな寝息を立てている亮平の傍で、点滴装置を確認しながら言った。

「一般の患者さんは、それなりに周囲の人に言いたいこと言って家族や我々を困らせることが多いのですが、それが全くないですね」

そういえば、この「末期癌の告知」を受けた時から、それを嘆いたり自分の運命を恨んだりの言葉を聞かなかった。いや、それほどに亮平とは真剣にこれまで会話らしい会話をしてこなかったのかもしれない。

「あまり普段から自分のことをしゃべらない子だから……」

親子の会話不足を、何気なくそんな言葉でかわした。

「両親には、あまり余計なことを言わないことが孝行だと思ってるんですねえ……。いつだったか亮平君は、お父さんお母さんには本当に感謝していると言っていましたよ」

Nさんは記録用紙にボールペンを走らせながら、小さな声でゆっくりと言った。亮平とは同世代で聴き上手なのか、親友の如く毎日いろんなことを二人で話しているようだった。

「親に感謝ですか……」

そう言いながら私は、急に込み上げてきた悲しみを無理に抑え込もうと、窓の外に目をやった。どんより曇った空に、冬枯れの落葉樹の森から鳥の群れが勢いよく海の方角に飛び立っていった。

初日の出を見たあの日から一週間後、亮平の病状は急変し、静かに眠るように旅立っていった。葬儀・四十九日法要・納骨と慌ただしく所定の行事を終え、やっと一息ついた頃には、近くの香貫山かぬきやまは早咲きの桜と辛夷こぶしの白い花でひと際春の香りが目立つようになっていた。その頃から、これまでの緊張が解れたためか、妻と私は極度の疲労と虚脱感に襲われ頭痛と目眩の医者通いとなってしまった。

そんな体調不良の中でも、そろそろ遺品整理を始めねばと、亮平が闘病生活で欠かさず手元に置き使用していたタブレット型パソコンの整理を始めた。そのパソコンの中身は、通話記録もファイル関係もすでに亮平が「それ」を意識した段階で、意図的に全て削除したようだった。しかし、そのパソコンに一つのファイルだけが残されていた。それはデジカメの写真ファイルで数年前に撮られた「夏祭り」のようだった。それは、川向こうに大きく打ち上げられた花火を背景に、藍色の浴衣を着た女の人が団扇を持ちながら笑顔でポーズを取っている数枚の写真であった。そして最後の一枚は、無精ひげを伸ばしその女の人と頬を擦り寄せ、満面の笑みを浮かべながらビール乾杯している半袖姿の亮平がそこにあった。

その残された写真集を見ながら、これは亮平が最後の「削除」作業を忘れたのだろうか、それとも意図的に誰かに何かを伝えたかったのだろうかと思った。

「亮平お前の人生は本当に幸せだったのか」

誰にも当たり散らすことのできない怒りと悲しみが、再び私の胸に深く込み上げてきた。